ごあいさつ

宇都宮短期大学学長　須賀 英之

この度、武蔵野音楽大学教授で本学特別講師でもある永岡信幸先生の、ショパンのエチュード全曲リサイタル開催の運びとなりました。これまでに 第4回リカレント教育のためのピアノ研修会や 第2回ミュージックフェスティバル in 宇都宮 にもお越し頂いていますが、 今回は昨年、東京文化会館での全曲演奏会が絶賛され、今夏CD収録を予定されている中での本学公演となります。

永岡先生は優れた後進者の育成にあたる一方で、ブダペストでのデビューから39年、精力的な演奏活動を展開し、最近のリサイタルでは、2013年にショパン「ピアノソナタ全3曲」、2015年に「24の前奏曲」を取り上げています。明るくおおらかな演奏スタイルで作品の真髄を極めることで定評のある、永岡先生のショパンの魅力とエチュードの醍醐味をご堪能ください。

PROFILE

東京都出身。武蔵野音楽大学・同大学院修了、クロイツァー賞受賞。リスト音楽院、ベルリン芸術大学、パリにて学ぶ。坂井玲子、P.ショイモシュ、K.ヘルヴィヒ、G.ムニエの各氏に師事。85年ヴィオッティ、マルサラ、86年ブゾーニ、マリア・カナルス、87年エピナル等国際コンクールに入賞。国内・ヨーロッパ各地にてリサイタル、ベルリン響、ザールブリュッケン響、ハイドン響等オーケストラとの協演、また室内楽・歌曲の分野でも活躍。NHK、SFBベルリン放送、フランス国営放送等に出演。CDにはリスト・巡礼の年第1年「スイス」/ノルマの回想、ベートーヴェン・ピアノソナタop.106「ハンマークラヴィーア」/ op.110、ショパン・ピアノソナタ全3曲がある。2023年6月東京にてショパン・エチュード全曲によるリサイタルを開催。武蔵野音楽大学教授、宇都宮短期大学音楽科特別講師。

2024年度　本学主催の演奏会や講座予定（須賀友正記念ホール）

8/17(土)	トリビュート(吹奏楽)コンサート2024
9/28(土)	歌とアンサンブルによる　わくわくキッズコンサート
11/16(土)17(日)	彩音祭 メインコンサート･附属高等学校吹奏楽部コンサートほか
1/12(日)	MFU（ミュージックフェスティバル in 宇都宮） ※ピアノ以外の楽器と声楽対象
2/15(土)	赤松林太郎 リカレント教育のためのピアノ研修会
2/16(日)	MFU（ミュージックフェスティバル in 宇都宮） ※ピアノ対象
3/8(土)	第57回宇都宮短期大学音楽科・附属高等学校音楽科 卒業演奏会

本学ホームページからお申込みください。
http://www.ujc.ac.jp

宇都宮短期大学音楽科　〒321-0346 栃木県宇都宮市下荒針町長坂 3829
Tel 028-648-2331（代） Fax 028-648-9870　Email ongaku@ujc.ac.jp

Récital de l'intégrale des études de Chopin

永岡 信幸

ショパン・エチュード
全曲リサイタル

2024年7月20日(土)
14：00 開演

宇都宮短期大学須賀友正記念ホール

主催：宇都宮短期大学音楽科
後援：武蔵野音楽大学同窓会 栃木県支部

Récital de l'intégrale des études de Chopin

PROGRAM

フレデリック・ショパン　Frédéric Chopin
(1810 ～1849)

夜想曲 ハ短調 作品48-1　Nocturne c-moll op.48-1

12のエチュード 作品10　Douze Etudes op.10

1. ハ長調Allegro
2. イ短調Allegro
3. ホ長調「別れの曲」Lento, ma non troppo
4. 嬰ハ短調Presto
5. 変ト長調「黒鍵」Vivace
6. 変ホ短調Andante
7. ハ長調Vivace
8. ヘ長調Allegro
9. ヘ短調Allegro, molto agitato
10. 変イ長調Assai vivace
11. 変ホ長調Allegretto
12. ハ短調「革命」Allegro con fuoco

～ 休 憩 ～

3つの新しいエチュード　Trois Nouvelles Etudes

1. ヘ短調Andantino
2. 変二長調Allegretto
3. 変イ長調Allegretto

12のエチュード 作品25　Douze Etudes op.25

1. 変イ長調「エオリアン・ハープ」Allegro sostenuto
2. ヘ短調Presto
3. ヘ長調Allegro
4. イ短調Agitato
5. ホ短調Vivace
6. 嬰ト短調Allegro
7. 嬰ハ短調Lento
8. 変二長調Vivace
9. 変ト長調「蝶々」Assai allegro
10. ロ短調Allegro con fuoco
11. イ短調「木枯らし」Lento-Allegro con brio
12. ハ短調「大洋」Molto allegro con fuoco

曲目解説　原 明美［音楽評論家］

19世紀、音楽史で言う「ロマン派」の時代には、ピアノの演奏技術も表現性も、飛躍的に発展した。また、当時の音楽家たちの多くは、作曲した曲を自分で演奏した。優れたピアニストは、ピアノのための名曲も書き残したのである。フレデリック・ショパン（1810－49）は、その代表的な一人であり、同世代のフランツ・リストと共に、パリのサロンをはじめとしてヨーロッパ各地で、名ピアニストとして人気を博した。

ポーランドのワルシャワ近郊ジェラゾヴァ・ヴォラに生まれたショパンは、39年間の生涯の後半を主にフランスで送り、祖国に帰ることなく世を去った作曲家である。彼にとって、ピアノという楽器は最も重要な表現手段であり、書き残した作品の大半はピアノ曲だった。従来のジャンルや様式について、表現の可能性を深く追求したピアノ曲が、数多く生み出されており、彼の稀有の創造性が反映されたその作品は、ロマン派のピアノ音楽に新しい境地を開いた。

永岡信幸は、最近のリサイタルで、2013年にショパン「ピアノ・ソナタ」全３曲を、2015年に「24の前奏曲」を取り上げている。そして今回、満を持して、「エチュード」全曲をプログラムに組んだ。ブダペストで開催したデビュー・リサイタルから38年というキャリアを誇る永岡の、たゆまぬ努力の成果が、今回も発揮されるだろうし、また同時に、彼ならではの明るくおおらかな演奏スタイルで、ショパンの魅力を伝えてくれることだろう。

夜想曲 ハ短調 作品48－１

ショパンは、アイルランド出身のジョン・フィールドが創始したという夜想曲（ノクターン）の様式に基づいて、繊細優美でロマンティックな夜想曲を、21曲ほど残している。今回演奏される作品48－１は、1841年に作曲され、弟子のロール・デュペレ嬢に献呈された。レント、ハ短調で書かれ、激しい曲想を持ち、堂々たる威容を印象づける１曲である。

12のエチュード 作品10

ショパンのエチュード（練習曲）は、「12のエチュード」作品10、「12のエチュード」作品25と、作品番号のない「三つの新しいエチュード」、以上全部で27曲が残されている。特に、「作品10」と「作品25」としてある二つの曲集は、技術的にも音楽的にも難曲ぞろいであり、内外の音楽コンクールの課題曲などにも用いられ、演奏者の技量が試される作品である。ピアニストを目指す人たちにとって必修の曲集であり、各曲にピアノのさまざまな技巧が盛り込まれているだけでなく、メロディーを歌うなど音楽的な修練も含み、ショパンならではの多彩にして魅力的なピアニズムが散りばめられている。つまり、これらのエチュードは、技術を磨く訓練に留まらず、ピアニストのテクニックと表現力を聴き手に披露することも目的とするような、通して聴く鑑賞作品としての価値が高い曲集であり、まさに、コンサートのためのエチュードと言えるだろう。

「12のエチュード」作品10は、1829～33年に作曲された。ショパンが20歳までの間に、この充実した練習曲集の大部分が書きあげられていたというから驚きである。そして、1833年に出版され、ピアノの名手でもあった作曲家のフランツ・リストに献呈された。一部の曲については、要求される技巧（第２番「半音階のエチュード」）、曲想の特色（第５番「黒鍵」）、また、曲にまつわるエピソード（第３番「別れの曲」、第12番「革命」）によって、後年、愛称がつけられた。

半音進行で動くメロディーのなかに、指の交差など困難な運指が含まれた第２番は、「半音階のエチュード」である。メロディーの美しさが印象的な第３番は、ショパンを描いたドイツ映画「別れの曲」（1934年）の音楽として用いられたことから、「別れの曲」という愛称で呼ばれるようになり、単独で小品として演奏される機会も多い。第５番は、ほとんどピアノの黒鍵だけが使われていることから、「黒鍵」「黒鍵のエチュード」として知られている。そして、激しい曲想を持つ第12番については、次のようなエピソードが伝えられている。ポーランドをあとにしてウィーンへ赴いたショパンは、その後パリに渡るが、立ち寄ったシュトゥットガルトで、ワルシャワがロシア軍に鎮圧されて革命が敗北に終わったことを知った。そのとき祖国を想いながら、悲惨な運命に対する怒りをこめて作曲したのが、このエチュードだという。「革命」の名で呼ばれるようになったのは、このエピソードによるものだとされている。

全12曲の内訳は次の通りだが、今回のように通して演奏される場合、調の流れの美しさも注目されよう。平行調へ、属調または下属調へ、或いは同主調へ、と続く場面が多い。

第１番：ハ長調／第２番：イ短調「半音階のエチュード」／第３番：ホ長調「別れの曲」／第４番：嬰ハ短調／第５番：変ト長調「黒鍵」／第６番：変ホ短調／第７番：ハ長調／第８番：ヘ長調／第９番：ヘ短調／第10番：変イ長調／第11番：変ホ長調／第12番：ハ短調「革命」。

3つの新しいエチュード

ショパンの1839年ごろの作と推定されている「三つの新しいエチュード」は、モシュレスとフェティスの編集した練習曲集に収められて、ショパンが世を去った後の1840年に出版された。さらに、1841年に単独でも出版されている。３曲から成るが、第２曲と第３曲の順序は、エディションによって異なる。今回、永岡信幸は、パデレフスキ版に従った曲順で演奏するという。

第１曲：ヘ短調／第2曲：変二長調／第３曲：変イ長調。

12のエチュード 作品25

ショパンの「12のエチュード」作品25は、1832～37年に作曲され、1837年に出版され、作曲家フランツ・リストの恋人だったダグー伯爵夫人に献呈された。「作品10」と同じように、一部の曲については、要求される技巧（第６番、第８番、第10番）や、曲想の特色（第１番、第９番、第11番、第12番）により、のちになって、愛称をつけて親しまれるようになった。

第１番は、ハープを想わせる繊細なタッチや牧歌的な曲想から、「エオリアン・ハープ」または「牧童」と呼ばれている。第６番は、三度の重音が連続する「三度のエチュード」であり、第８番は、六度の重音が連続する「六度のエチュード」である。蝶の優雅で軽やかな動きを想像させる第９番は、「蝶々」の愛称で知られる短いエチュード。第10番は、オクターヴの連続する「オクターヴのエチュード」である。第11番は、その曲想から「木枯らし」の愛称で親しまれている１曲だが、主に右手に現れる細かな装飾的音型を滑らかに演奏することは、きわめて困難である。両手の分散和音がダイナミックな動きを続ける第12番は、おそらくは、その動きの壮大さが、大きな海原を連想させることによって、「大洋」と呼ばれるようになったのだろう。

全12曲の内訳は次の通りだが、やはり「作品10」と同様、12曲が通して演奏される場合の、調の流れの美しさにも注目したい。

第１番：変イ長調「エオリアン・ハープ」（または「牧童」）／第２番：ヘ短調／第３番：ヘ長調／第４番：イ短調／第５番：ホ短調／第６番：嬰ト短調「三度のエチュード」／第７番：嬰ハ短調／第８番：変二長調「六度のエチュード」／第９番：変ト長調「蝶々」／第10番：ロ短調「オクターヴのエチュード」／第11番：イ短調「木枯らし」／第12番：ハ短調「大洋」。